

三・一、五・四運動と黎明会

武藤秀太郎

学術振興会特別研究員（国際日本文化研究センター）

はじめに

2005年3月1日、韓国の盧武鉉前大統領は三・一独立運動を記念する式典で、日本に対し過去の歴史問題を精算するために、さらなる真実の究明と心からの謝罪、必要に応じた賠償への積極的姿勢を要求した。盧前大統領は2004年末の日韓首脳会談で、歴史問題が日韓の友好親善を阻害しないよう努力すると語っていた。その彼が、改めて過去への反省を促した背景には、周知のように、日韓が互いに領有権を主張する竹島（独島）に関連して、島根県議会が2月23日、当県への帰属百周年を記念する「竹島の日」を定める条例案を提出したことが挙げられる。その後、3月16日に条例案が県本義会で可決されると、盧前大統領は日本の竹島領有権主張が、過去の植民地支配を正当化するもので、歴史問題と共に断固たる対処をすることを明記した対日新ドクトリンを発表した。政府間のみならず、地方・民間レベルの交流にも延期や中止が相次ぎ、ソウルの日本大使館前で連日、抗議行動がくり広げられたことは記憶に新しい。

また、これに呼応するかのように入ると中国でも、3週連続で週末にわたり、各地で戦後最大規模の反日デモが頻発した。とくに、北京や深圳、上海などの大都市では、デモは数万人単位にまで膨れ上がり、日本大使館・総領事館や日本料理店、日系スーパーが、投石で窓ガラスが割られるなどの物的被害を受けた。中国政府はデモの原因が日本側の誤った歴史認識にあるとして、謝罪を拒絶したが、確かにこの時期、日本の安保理常任理事国入りへの動きや、東シナ海におけるガス田開発、台湾海峡問題の平和的解決を掲げた日米戦略目標の発表、歴史教科書の採択など、韓国の場合と同様、両国間の過去にまつわる問題がクローズアップされていた。懸念された五・四運動記念日におけるデモは、中国政府の取り締まり強化により回避されたものの、その後も靖国参拝問題など、いわゆる「政冷経熱」の状態が続いた。竹島（独島）問題も依然として日韓の火種となっており、成り行き如何によっては、再び同様な排日熱が高まることも考えられよう。

このように一瞥しても、韓国から中国へと連鎖した今回の反日騒動が、歴史問題と深く絡み合い、また三・一運動、五・四運動という過去を、強く想起させる事件だったことが分かる。三・一運動は、日本の植民地下に置かれていた朝鮮人が、国王高宗の葬儀をきっかけに1919年3月1日、ソウルのパコダ広場へ集結し、独立宣言したことにはじまる。折しも、パリ講和会議では、ウィルソン大統領により提唱された民族自決主義が審議され、日本当局は迅速な対応を迫られたが、独立運動はその後、朝鮮全土、さらには国外へと拡大していった。他方、中国でも5月4日、講和会議で山東省のドイツ権益が日本へ譲渡されることが決まると、北京の学生が抗議集会を開き、日本商品のボイコットなどの抗日運動が全国各地へ波及した。公表された「北京学生界宣言」では、三・一運動に触れ、「もし国家の存亡、国土の割譲、問題の急迫に際しても、国民がなお一大決心を下して最後の奮起をなしえないとすれば、これは20世紀の劣等民族であり、人

類として語るに足るものではない」と決起が促され¹、同様の反応がみられた今回の反日デモとの類縁性がみてとれる。

もちろん、今日と当時とは、国際状況や三国間の関係も大きく異なっており、安易な比較は慎まなければならない。ただ、三・一、五・四運動後、日朝・日中関係が、さらに今日まで遺恨をのこす状態へ陥っていったことを考えると、過去の省察から得られる教訓も少なくないだろう。本論文では、以上の問題意識に立って、当時日本の言論界をリードした知識人団体である黎明会の足跡を辿ってゆくことにしたい。

黎明会と三・一運動

1918年8月、寺内正毅内閣を弾劾した関西新聞社・通信社大会に関する大阪朝日新聞の記事にあった「白虹日を貫けり」という一節が、朝憲紊乱罪で告発され、さらに第一回公判後、社長の村山竜平が白昼、暴漢に襲われるという事件が起こった。この村山襲撃の黒幕とされた浪人会の手法を、民本主義の主旨者として知られる吉野作造が、言論弾圧と批判すると²、これに浪人会が反発、両者の間で立合演説会が交わされることとなった。黎明会は、この立合演説事件を機に、吉野と経済学者の福田徳三が中心となり、結成された学者・知識人の啓蒙団体で、大綱として「一、日本の国本を学理的に闡明し、世界人文の発達に於ける日本独特の使命を発揮すること。二、世界の犬勢に逆行する危険なる頑冥思想を撲滅すること。三、戦後世界の趨勢に順応して、国民生活の安固充実を促進すること」が掲げられた。時あたかも、全国各地で続発した米騒動、原敬政友会内閣成立の直後で、まさに大正デモクラシーの「黎明」を告げた思想運動だったといえる。

黎明会の主たる活動は、月1回の講演会とその筆記の公刊にあった。第1回講演会は、ちょうどパリ講和会議が開会した1919年1月18日に举行され、三・一運動は会が始動して間もなくの出来事であった。

ここではまず、日本の新聞が三・一運動を当初、どのように伝えていたかを確認しておきたい³。事件の第一報は、3月3日付の『毎日新聞』や『朝日新聞』、『時事新報』で、高宗葬儀に付随する形で報じられたが、各紙が紙面を割いて、大きく採り上げるようになるのは、7日以降である。収束の兆しをみせない事態を、新聞メディアはどう報じたのか。この点がうかがわれる記事・社説を、いくつか抜き出してみよう。

・『東京朝日新聞』

「集団には米国人経営のセブランス病院看護婦五、六名加はり其看護婦の手より盛に宣言書を散布されたるが中一名は其筋の手に引致されたり因に過日來の騷擾に際し必ず何処よりもなく数名の外国人群衆の中に現れ見物し居たり」（「米人の看護婦」3月7日、『大阪朝日』にも同内容の記事）

1 西順蔵編『原典中国近代思想史』第4冊、岩波書店、1977年、249頁。

2 吉野作造「言論自由の社会的圧迫を排す」『中央公論』1918年11月。

3 この問題については、すでに多くの研究蓄積がある。三・一運動期のより具体的なメディアの反応については、朴慶植『朝鮮三・一独立運動』平凡社、1976年、第6章「日本・中国・アメリカにおける反響」、山中早人「三・一独立運動と日本の新聞—『事件』報道の経過と論調分析」『新聞学評論』第30号、1981年、姜東鎮『日本言論界と朝鮮—1910—1945』法政大学出版局、1984年、第3章「『三・一運動』期言論界の朝鮮統治論」、松尾尊允『民本主義と帝国主義』みすず書房、1998年、第1部「III 吉野作造と朝鮮」、長田彰文『日本の朝鮮統治と国際関係—朝鮮独立運動とアメリカ1910—1922』平凡社、2005年、第9章「三・一運動と日本」などを参照。

・『東京日日新聞』

「殊に外人中排日思想を有して之を濫用する者あり、朝鮮人民を欺瞞して其資料資料とせんとするもの少からざるが如き、朝鮮人の最も注意せざるべからざる所なり」（『日鮮の融合』3月4日、『大阪毎日』にも同社説）

・『国民新聞』

「何等政治的自覚を有しない無力温順な彼等鮮人が恰も文明国人の立憲的運動にも等しい表面に比較的統一静肅な示威運動を行ひ得たことに不審の感を懐くと同時に其裏面に何者か魔者の手の動いて居る事を予覚せずには居られない果然同日運動を招来せしめた迄の過程に亜米利加人を中堅とする朝鮮在住の宣教師耶蘇教徒の輩が如何に要意要周到な所を用いたか判明する」（『秘密出版物をする等運動の手は』3月7日）

いずれも民族宗教である天道教やキリスト教信者により煽動され、さらに背後に、外国人宣教師などの黒幕が存在したなど、運動の他律性・謀略性が強調されたことが分かる。また、検挙された天道教主の孫秉熙が「陰険で野望家」（『大阪毎日』3月14日）、「獣的の妖僧」（『萬朝報』3月20日）と貶められた一方、憲兵の負傷・殉職が、人数のみの朝鮮人死傷者とは対照的に、センセーショナルに報じられた。確かに、当初においても「朝鮮人は今どんな感じを抱いて居るか、其の心を察しやるが宜しい」（『都新聞』3月7日）、「寧ろ日本人自身に於て大に反省するの要あるを感ずる」（『時事新報』3月9日）といった意見がみられ、以後総督政治を批判する論調が高まっていったものの、少なくとも初期の報道により、陰謀説や被害者意識が、読者へ刷り込まれたことは否定できない。

さて、こうした世論が形成されつつある中、黎明会では3月19日、朝鮮人学生を招いて例会が開かれた。会記録によれば、学生3名が「極めて冷静に至誠を披瀝して、彼等の所見を開陳した」という⁴。当然、これら学生の意見をふまえてであろう、吉野は三日後の22日に行われた黎明会第3回講演会で、何より自己が反省すべきことを、こう説いていた。

朝鮮で排日運動が起つた。あれは某国宣教師の煽動だとか又は天道教の煽動だとかいふ。或点までは此等の非難も事実でありませう。けれども、尚ほもう一つ退いて吾々自ら反省するといふのでないと、根本の解決に至らない。…自己を反省するといふ、さういふ訓練を欠くことの結果として、もう一つ問題の根本解決に妨ありと思ふ事は、為めに相手方の気持、相手方の心持を諒解するといふことを努めないといふ事であります。

第三者が煽動したという見方はまた、少数の有力者さえ押さえれば、他国をコントロールできるという考えを生むこととなる。その結果、本来相手とすべき「国民」が無視され、外交が形式主義に墮しているというのである。

4 『黎明会講演集』第4輯、1919年6月、72頁。松尾尊兌氏の研究によれば、出席した朝鮮人学生は、金雨英、姜宗燮、金俊淵、崔承萬、張仁煥、白南薰、卞熙瑢、徐相国の8名で、発表者の1人は、金俊淵だったという。また、松尾氏はこの例会が、吉野と金雨英、金俊淵、白南薰らの間で計画されたものと推測している（松尾尊兌「吉野作造と在日朝鮮人学生」『民本主義と帝国主義』みすず書房、1998年、178-9頁）。

5 吉野作造「先づ自己を反省せよ」『黎明会講演集』第3輯、1919年5月、2頁。

さらに当講演会では、福田が真のデモクラシーを、国家の繁栄と国民の「悦び」(joy) が合致することと定義した上で、次のように朝鮮の独立要求へ理解を示していた。

先達も或朝鮮の学生が言つて居る、日本に合併せられて吾々の生活が如何に善くなつても吾々は非常に腐敗した朝鮮の独立国民である方が宜いと言つて居りましたが是が本当の叫びであらと思ふ、朝鮮が日本になつたからさう云ふことを云ふやうになつた、元の朝鮮人はさう云ふ事は感じなかつた。如何にその国の政治が悪くても他の国に支配されるよりも自分の国である方が宜い⁶。

福田は当時、労働という創造的行為と、その労苦の代償である悦びを分断させている財産権本位の私法を、生存権擁護へと改良する「法律の社会化」を唱えていた。たとえ悪政であっても、政権が自己に帰属する方が好ましいという指摘は、この「創造」(creation) と「所有」(possession) の調和という論理を、朝鮮問題へ適用したものといえよう。

その後、6月25日に開かれた第6回講演会では、改めて「朝鮮問題の研究」が統一テーマとして掲げられた。多数の朝鮮人も含んだ1700名の聴衆の前で、総論的役割を担った吉野は、軍人が教会へ集合した朝鮮人を虐殺した堤岩里事件など、この間に海外メディアや知人から伝えられた日本人の「野蛮性」を非難した一方、「朝鮮統治の改革に関する最少限度の要求」として、(一) 教育や雇用面における朝鮮人への差別的待遇の撤廃、(二) 武人政治の撤廃、文治主義への移行 (三) 朝鮮の伝統を無視した同化政策の見直し、(四) 内地並みの言論の自由の供与、の四点を提示した⁸。また、福田も堤岩里事件のような残虐行為を犯しながら、講和会議で人種差別待遇撤廃を提議するダブル・スタンダードを批判した。朝鮮人による独立の叫びは、「已むを得ず発した所の弱者の声、劣者の声、虐げられた者の声」であり、日本内地へ向けられた異議申し立てにはかならない。言論の自由を保障する具体策として、福田は一歩踏み込んで、朝鮮議会の開設、憲法発布を主張した⁹。

吉野・福田以外の演説者(木村久一、阿部秀助、麻生久、内ヶ崎作三郎)も、吉野の四要求を踏まえつつ、各々の立場から朝鮮統治の刷新を訴えた。ただ、吉野が朝鮮独立について、「今後精密なる研究を要する問題」と棚上げしたように、いずれも論者も独立を否定、ないしは明言を避けていた。とくに、福田は独立に「日本人としては絶対的に反対」と述べており、先の演説と比ベトーン・ダウンした感は否めない。しかし、この講演会が、当時朝鮮政策批判を公然とおこなった唯一の集会であり¹⁰、また吉野をはじめとする会員達が、独立運動を起こした朝鮮人側に立った理解に努め、何より自己を反省する必要性をくり返し説いたことは、今日の観点からみても銘記すべき事実であろう。

6 福田徳三「如何に改造するか」『黎明会講演集』第3輯、1919年5月、97頁。

7 『黎明会講演集』第6輯、1919年8月、114頁。

8 吉野作造「朝鮮統治の改革に関する最小限度の要求」『黎明会講演集』第6輯、1919年8月。

9 福田徳三「朝鮮は軍閥の私有物に非ず」『黎明会講演集』第6輯、1919年8月。

10 松尾尊兌『大正デモクラシー』岩波書店、1974年、297頁。

黎明会と五・四運動

黎明会講演会は通常、東京の神田青年会館で開催されたが、1919年5月4日に一度、大阪の中之島公会堂まで出向いたことがあった。主催した大阪毎日新聞の記事によれば、「聴衆の殺到する宛ら潮のやう、階上も忽ち寸隙も余さざるに至つた」盛況ぶり¹¹、黎明会としても異例の五千人の聴衆を集めたという。「山東問題」を題目に挙げた吉野は、日本の山東權益を擁護しながらも、講和会議全権代表の顧維鈞や王正廷に代表される中国側の反発を謀略視する風潮を戒め、朝鮮の場合と同じく自己反省する必要性を主唱した¹²。いうまでもなく、講演会は五・四運動が起こった日に当たるが、講演の模様を紹介した翌日の記事の傍らには、皮肉にも「山東問題を顛覆したのは顧維鈞の後妻だと乙な所へ理屈をつける排日新聞焼跡の釘拾い」と、中国英字新聞を揶揄する内容が掲載されていた。

ここでも、さし当たって事件直後における新聞報道を簡単にチェックしておきたい。第一報は各紙共に、事件から2日後の5月6日のことであった。

- ・『東京日日新聞』

「今回暴挙を企てたる北京大学なるものは千八百七十年頃米国基督教徒の創設したる小学校を八十八年に至りて大学に昇格したるものにして全く米国基督教会の経営に係るものなれば彼等が山東問題を機会として此際排日の行動に出でたるは怪しむに足らず」（「北京学生暴挙」5月6日）

- ・『国民新聞』

「最初熱心に煽動を試みたる在留英米人の某々有力者は最近上海の排日英字新聞『チャイナ・プレス』北支那『デイリー・ニュース』の両新聞をしてあらゆる讒誣中傷の言辞を掲げしめ…是等の事情に疎き北京の学生青年等は悲憤慷慨禁ぜざるもの如く連日各所に集合を催し…」（「北京に…突如として排日暴動起る」5月6日）

- ・『都新聞』

「雷同附和の民である支那人は英字新聞の排日記事に煽られた処へ何か煽動が新に加はつた結果の暴動と思はれる」（「暴動は煽動か」5月6日）

- ・『萬朝報』

「支那の排日暴動は何者かの煽動に基き、寧ろ国内政治家の権力争ひと見るを得べし、…米人等は支那に対して莫大なる資金を使用して盛んなるプロパガンダを行ひつつあるに対し、法人の支那に於て発行する新聞紙中には勢力あるもの少なく…」（「支那人の誤解」5月8日）

三・一運動の時と同様、騒動の主因が、専ら中国人の付和雷同的とされる性格や、英字新聞などの煽動に求められ、また愛国運動でなく、逆に民族性の欠如を示すものとして、無秩序さが強調されている。これを機に高まった日貨排斥の動きについても、困るのは購買者の中国人自身で、長くは続かないといった楽観的観測が大勢を占めた。三・

11 「黎明会大講演会」『大阪毎日新聞』1919年5月4日付（夕刊）。

12 吉野作造「山東問題」『黎明会講演集』第5輯、1919年7月。

一運動と比べても、相手の不条理さを論ずる記事が目立ち、日本側の非を顧みるものは、至って少なかったといえる。

黎明会では、三・一運動のように特集を組むことはなかったが、中国問題については、各論者が折に触れ発言していた。とくに吉野は、黎明会に限ってみても、「山東問題」のほかに「支那問題に就いて」（1919・4）、「日支相互の諒解」（1919・6）と、日中関係を主題とした講演を計3回行っている。五・四運動前の「支那問題に就いて」では、段祺瑞の武力討伐を支援するといった官僚的思考から脱し、革命運動の中から勃興しつつある真の国民的要求を把握すべきことを¹³、「日支相互の諒解」においては、日中が互いの立場を理解し合う必要性と共に、五・四運動が少数の指導者により煽動されたものでないことを¹⁴、それぞれ力説していた。

吉野は東京帝大卒業後の1906年1月から約3年、袁世凱の長男の家庭教師、および北洋法政学堂の講師として、天津を拠点に中国に滞在した経験がある。だが、「支那問題に就いて」の述懐によれば、吉野は滞在中、旧い官僚畑の人々との交際ばかりで、一人の「心友」も得られず、中国に人物なしと失望し帰国したため、「余り支那の前途に光明を認めないから、随つて其後も支那のことを研究する積りにもならず、支那のことは全く分らなかつた」という¹⁵。その吉野が中国研究を始めるようになったのは、ヨーロッパ留学中（1910・4-1913・7）に王正廷の人柄に触れたことがきっかけとされるが、実際に帰国後、『日支交渉論』（1915）や『支那革命小史』（1917）など、精力的に中国関係の論文・著作を発表していった。彼の中国観は、「今日の支那の排日熱は、一つには其の根柢を事大主義におく。支那は国際競争の激甚なる今日、不幸にして自ら独立して立つ事が出来ない」¹⁶と断じた「支那の政治的将来」（1914・11）から、革命運動の研究を進め、中国人留学生との交流を深めてゆく過程で、排日運動の深奥にナショナリズム形成を認める黎明会時代のスタンスへ至ったと考えられる。

ところで、三・一運動を機に朝鮮人学生の意見を求めたように、大阪公演後の6月5日に行われた第5回黎明会講演会の折、北京から教授・学生を東京に招き、色々懇談してみようという提案がなされた¹⁷。そこで、吉野が北洋法政学堂での教え子だった北京大学教授の李大釗へ手紙を送ったところ、次のような返事があったという。

北京学界は貴君の来遊を甚だ望んで居る。縦令大学の交換教授の試みが不可能とするも民間の学会や新聞社にして貴君を聘して講演を聴かんとする者がある。貴君が今夏或は今秋に於て駕を枉げて華に來り数月の間日本国民の真意及デモクラシイの精神を弊国人民の前に披示する事が出来れば東亜黎明運動の前途に甚だ重大なる関係を有するであらう¹⁸。

文面から吉野が、中国人に注目されていたことが窺われるが、事実、新文化運動の担い手であった李が創刊した『毎週評論』や『晨报』で、黎明会が目的を共有する日本の新潮流として、設立当初より好意的に紹介された事実を、松尾尊兌氏が明らかにしてい

13 吉野作造「支那問題に就いて」『黎明会講演集』第4輯、1919年6月。

14 吉野作造「日支相互の諒解」『黎明会講演集』第2巻第1輯、1919年9月。

15 吉野作造「支那問題に就いて」『黎明会講演集』第4輯、1919年6月、61頁。

16 吉野作造「支那の政治的将来」『新人』1914年11月。

17 吉野作造「日支国民的親善確立の曙光」『解放』1919年8月、260頁。

18 松尾尊兌「五四期における吉野作造と李大釗」『民本主義と帝国主義』みすず書房、1998、95-105頁。

る¹⁹。また、吉野自身も、中文訳された彼の文章が、「学生諸君の間に多少の影響があつたものと見え、多くの未見の友人より極めて同情に富んだ、又極めて感激に値する書面を貰つた」と、その反響の大きさを語っていた²⁰。

中国教授・学生の来日は、翌1920年の初夏に実現したものの、吉野の訪中は結局、政府の自肅要請もあり実現しなかった。ただ、その代わりであろうか、福田が1922年8月から10月にかけて、中国各地を歴訪、北京大学や南開大学、齊魯大学で講演を行っている。『北京大学日刊』に掲載された講演録によれば、福田は最も危険なものを、マルクス主義やボルシェヴィズムでなく、「対外資本主義的侵略」と位置づけた上で、今では日本の対外資本主義的性格を憂う日本人が多いこと、また中国人にとって「奇恥大辱的」な21箇条の要求が、一部の功名を貪る政治家によってなされたものの、日本国民全体がその責任の一端を負うべきことを主張し、以下のように講演を締めくくっていた。

我々は正義のため戦わなければならない。これこそ私が1918、9年に多くの博士と共同して黎明会を発起した原因である。諸君が正に掠奪される地位にあるのは、大変不幸で、辛いことである。(曲がりなりにも対外資本主義的侵略を認識する — 筆者)マルクス主義より更に一步進んで、国際間の掠奪を打破すること。このことは将来、必ず実現されると、私は思っている²¹。

この演説の反響について、『大阪毎日新聞』は「福田徳三博士が北京大学で国際資本主義排斥の講演をなすや、支那学生は深くその説に共鳴し、博士は大持であつた。上海また其の影響を受けた為めか此の種の思想起り、十月十日雙十節の際にも宣伝ビラを配布したものあり、運動は漸く具体化せんとする傾向がある」と報じている²²。この報道に接した福田は、自己の言説が中国で予想外の反響を得たことに感謝の意を表しているが²³、日中における啓蒙運動が連帯の動きをみせた、注目すべき一齣だったといえよう。

おわりに

黎明会は、毎回千単位の聴衆を集める盛況振りだったものの、1920年2月の第8回講演会を以て解散した。短命に終わった直接の原因は、国際労働機関（ILO）第一回総会への労働者代表選出をめぐる会員間の対立とされるが、吉野と福田におけるデモクラシー観の相違など、元々一枚岩でなかったことも事実である²⁴。だが、それだけに一層、

19 石川禎浩『中国共産党成立史』岩波書店、31-5頁。

20 吉野作造「日支国民的親善確立の曙光」『解放』1919年8月。

21 『北京大学日刊』1922年11月2日付。なお、この史料については、金沢幾子「福田徳三年譜」『一橋論叢』、2004年10月より教示を得た。

22 「国際資本主義打破の運動新たに勃興す」『大阪毎日新聞』1922年10月13日。

23 福田徳三「世界経済の恢復と日本支那米国の使命（其二完）」『改造』1922年11月、145頁。なお、中国へマルクス主義を体系的に紹介した最初の文章とされる李大釗「我的馬克思主義観」の後半部には、『統経学研究』（1913）など福田の著作を種本として書かれた箇所がある（後藤延子「李大釗とマルクス主義経済学」『人文科学論集』第26号、1992年）。福田経済学が中国へ与えた影響については、三田剛史・田中秀臣「福田徳三の中国への紹介」（『メディアと経済思想史』第2号、2001年1月）参照。

24 拙稿「戦間期日本における知識人集団—黎明会を中心に」猪木武徳編『戦間期日本の社会集団とネットワーク—デモクラシーと中間団体』NTT出版、2008年。

朝鮮・中国問題で当時のオピニオン・リーダーが共闘を組んだ意味は大きいだろう。

「はじめに」で述べたように、今日と当時では、欧米メディアの反応一つをとっても、大きく異なっている。ただ、日本国内へ目を向けた場合、竹島（独島）問題に対する盧武鉉前大統領の厳しい対応を、小泉純一郎首相が低迷する支持率の回復をねらった「日本叩き」と示唆したり、中国の反日デモが日本を牽制し、国内にたまった不満をそらすため、政府に誘導された「官製デモ」であることが強調されるなど、三・一、五・四運動の時と類似した観測を示していたことが分かる。この点については、外生的要因を認めつつも、「先づ自己を反省せよ」と説いた吉野や福田ら黎明会メンバーの姿勢から、今なお学ぶべき教訓があるのではないか。

最後に、吉野の演説から次の一節を引いて、拙稿を終えることにしたい。

私は何も支那と日本との間には長い深い歴史的の反目は無いと思ふ。西洋の民族の争ひにはさういふものは沢山ある。歴史的に三百年も四百年も永い間非常に喧嘩して、一方が一方を苛め通したので、容易に反感を取去ることは出来ないが。支那と日本はどういふ風であつたかといふに、さういふ歴史的の反目は殆んど絶無である。徳川時代三百年間には中にも精神的に支那と親交際があつた。喧嘩は少しもない。故に支那も日本の反目といふものは、歴史的に見ると殆んど無いと謂つて宜い²⁵。

25 吉野作造「支那問題に就いて」『黎明会講演集』第4輯、1919年6月、65頁。